

真夏のオアシス・ドリーム【第五章】

これほど目まぐるしく変わる夏も珍しいだろう。八月の一週目には幸せそのものだったのに、二週目には、完全に二人と疎遠になってしまった。

旭は自宅に行っても会ってくれなかった。耕介に至っては自宅にすらいなかったが。

旭に告白していたら、それも耕介が俺に気持ちを打ち明けたときに、ヤツに正直に言っていたら、こんな風にはなっただろうか。

耕介をフったって事は、俺のことが好きだったんだよな。多分……。

俺が悪い。なんだかんだと勝手に考えては、周囲を振り回して、三人の関係を壊したんだからな。

その日も『三日月園』に行った。それで、また優ちゃんに怒られた。

俺だっけなにかしたいんだが、他の二人と会えない以上、どうしようもないじゃないか。

『三日月園』にいるのも憂鬱で、いつもより早く夕方には帰宅しようとした。

門を出ると、そこには黒いレザージャケットを着込んだ

だ男が立っていた。

「耕介」

俺が思わず立ち止まると、ヘルメットを投げつけてきた。

「ツラ貸せよ」

そう言っ、傍らのバイクに乗り、早くしろとこちらを向かずに、手で合図してくる。

俺が後ろに乗ると、耕介は安全速度などといったものを無視して、バイクを走らせた。

「どこに行くつもりだ？」

俺の問いに答えず、耕介はひたすらバイクを走らせた。しばらくして、海岸沿いの道に出た。夕日が沈もうとしている海は、いつ見ても心を奪われかけた。

「まったく嫌になるよな」

唐突に耕介がはき捨てた。

「いいか、バカ。俺はな、男を乗せて、海の夕日を見るなんていう趣味は持ち合わせてねえんだからな」

「俺だっけねえよ」

「彼女を乗せるのが夢だったのに、どうして初めて乗せたのが男なのか」

「デメエが乗せたんだろうが。自問するな」

俺だっけ好きで男の背中に掴まってるわけじゃねえ、そう言うよ、ヤツはそりやそうだ、そうじゃなきゃ友人なんてしてねえよ、と。

友人？ コイツまだそう……。

ヤツは、海岸線を走ってしばらくしたトコでバイクを止めた。そこは一軒の民宿の前だった。

「ここ、俺の今のバイト先。家の人が倒れたらしくてな、住み込みでしばらく働いてた」

耕介はそう言って、その玄関口に張ってあるポスターを指して、

「知ってるか？ この辺りはな、八月最終週の頭に花火大会やるんだよ」

そういえば、聞いたことはあるな。俺は汐風市でも、南外れのほうに住んでるからなじみが薄いけど、市の一番北外れの地区では、そんなことをやるらしいな。

「ま、この辺りは俺の地元だからな。情報提供感謝しろよ」

「なんのことだ？」

質問に返ってきたのは、ヤツの右ストレート。前のように食らわず、手で受けた。パンチ自体、本気で撃ってきたものでもなかった。

「おいおい、お前らの仲がくつつく手前で滅茶苦茶になってんの、知らねえと思ってんの？」

ヤツは汗で張り付いた髪を鬱陶しそうに掻き上げると、「つーかよ、あれからお前らがどうなってるか気になったんだよ。つたく、俺も何やってるんだかな」

ヤツは泣きたいのか笑いたいのかよくわからない、複

雑な表情をしていた。

「あのなあ、俺だって、旭のこと好きなんだぜ。でもなあ、彼女が選んだの俺じゃあないわけだ。でも、まあ俺としちゃあムカつくけど、旭のために応援してやりたいわけだよ」

ヤツが言ってることは、わかるようで全然まとまっていけない。ただ、言いたいことはわかった。

「旭に思い切って久々に連絡してみれば、なんでこうなっちゃったんだろ、とか言いながら泣いてるし、……まあ、俺にも責任があったわけだがな。とにかくだ、三人がまた仲良くなれりゃあいいわけだ」

「そうだな」

俺は、ため息混じりに頷いた。

「おいおい、何やる気なさそうにしてんだよ」

ヤツが無然として言う。

「そうじゃねえよ。旭が会ってくれねえんだよ」

「だから、そうなってくれるようにするんだよ。バカか。つたく、俺がわざわざこの民宿に予約までいれてやってるんだぞ。花火大会の日に」

「それって」

俺はさすがに驚いた。ヤツは例の軽薄そうな笑みを浮かべると、

「お前、今いやらしい想像しただろ？」

「ち、違っ」

「まあ、気持ちにはわかる。俺も男だからな。それに、ここは泳げるから、水着も拝めるといふスバラシイ場所だ。旭スタイルいもんねえ」

「そんな想像してねえ！」

俺はさすがに反論した。顔が熱い。おやーといいながら、耕介は肩をすくめて、

「さすがに、二人きりにするのは危険そうなので、俺も一緒に泊まるよ。残念だったな。第一、三人の仲をどうにかしねえと、問題解決にならねえだろうが」

その通りだと頷いた。心中、少し残念でもあったが、それはまだ取らぬ狸のとうか……。

「じゃ、連絡任せたぞ。後はお前しだいだ」

耕介はスタンドを外しバイクに跨った。

「サンキュ」

後部に跨るとき、自然とそう言っていた。

【最終章へ続く】